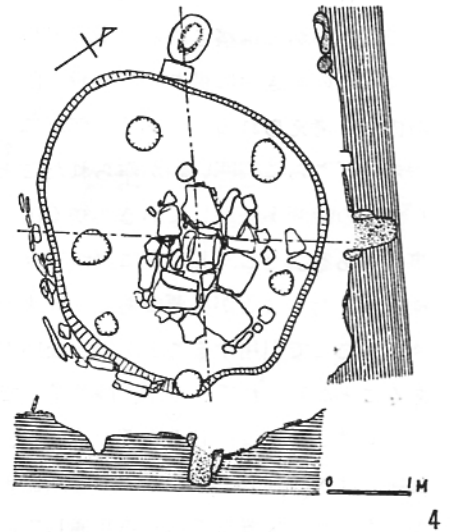
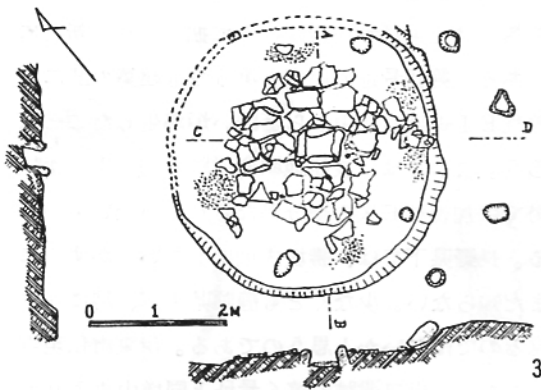
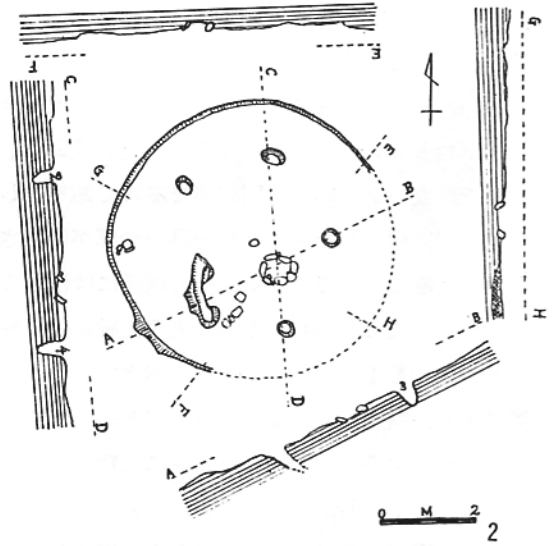
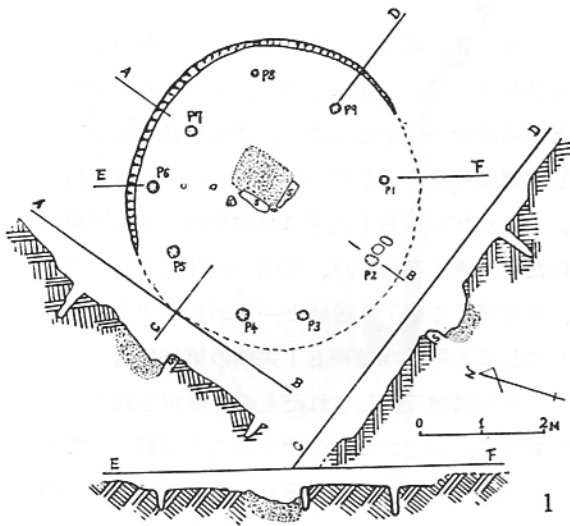


うであり、逆にⅡ式期のものには石囲いのものが多いようである。こうしてみると一番問題になるのが第6住居址である。この住居址は ①住居址の規模が大きくⅡ式期のものに勝るとも劣らない。②石囲いがある。③明確に加曾利EⅠ式期と判段できる第15号住居址の上層にあつて、後出のものである。④加曾利EⅡ式土器の破片も若干出土している。などの諸点を総合すると多分に加曾利EⅡ式期の住居址ではないかという疑問が強まるのである。しかし北側に棚状の張り出しがあり、この部分から勝坂式土器に類似した台付鉢形土器の台部が発見され、これが加曾利EⅠ式期における勝坂式の残象として捉えることができて、それ以降には決してならないと考えられる点、前項の疑問に反証するものである。なお加曾利EⅡ式の第5住居址に接触し、また同じく第7住居址と一部が複合する点、やはり加曾利EⅠ式期のものと見るべきであろう。それにしても同じ加曾利EⅠ式期の第15住居址の上層にあり、調査の結果は第6号の方が後出である点、同時期に建て直しされたものと推定されるのである。そうすると加曾利EⅠ式期にも新旧の住居址があつて、一応二つに分けて考える必要も出てくるわけである。しかも第6住居址は第15住居址の竪穴の上に土を盛つて床を張り、さらに周辺を削つて大きな床面を作っているのである。家族数の増加か、または用途の変更か、その理由は明らかではないが、6号住居址の北側に、棚状の張り出しがつけられたことに、この住居址の性格が示されているのではないかと推察される。張り出し上から、台付土器の台が発見されたことなどから考えて、あるいは祭壇の如き用に供された施設ではあるまいか。すると特殊な立場の人、たとえば司祭者の如き人の住居と考えられるのである。何れにしても第6号住居址は、第15号住居址の上に拡大されて新たに作られ、さらに石囲いが作られたことになるわけである。第15号址の廃棄と第6号址建築の間にどれだけの時間が経過しているか知る由もないが、加曾利EⅠ式期の途中から石囲いが生じたことは事実である。そしてⅡ式期に至つて盛行したのであろう。この点は今後他地域の遺跡の場合とも比較検討して行くことが必要である。従来報告された遺跡では加曾利E式の細分がなされていないものが多く、ここで引用することができないのは残念である。長野県下では、勝坂式期に石囲いがあることが知られているが、静岡県下ではその例をまだ知らない。少なくとも静岡県東部、特に伊豆地方ではこの加曾利EⅠ式期の途中に、その初象を見るのではないかと思うのである。伊東市仏現寺遺跡では加曾利EⅠ式期の円形竪穴住居に、石囲いがあり、出口遺跡の第6号址と同様中央より大きく南寄りに位置している点共通している。三島市奥山、沼津市鳥谷、富士宮市大岩宇箕輪等ではやはり円形竪穴住居に石囲いが存在するが、これらはいずれも加曾利EⅡ式期または後期のもので、この時期にはほとんど普遍的である。次に伊東市赤坂、三島市千枚原等では敷石住居址が発見されているが、赤坂の場合からすると、円形竪穴の中に敷石が見られ、中央にやはり石囲いが見られる。このほか伊豆地方に多い敷石住居址は、加曾利E式の三分された今日において、加曾利EⅡ式以前に遡り得るものは今のところ皆無である点も大いに注目すべきであろう。つまりこの種の住居址は縄文中期末の加曾利EⅢ式期に初現し、以後伊豆諸島の利島大石山遺跡に見る如く、後期の称名寺式期に継承され、さらに三島市奥山のように堀ノ内式期にも至っているのである。当出口遺跡に数多くの住居址が発見されながら敷石住居が一つも存在しないのは、やはり加曾利EⅢ期まで集落がほとんど続かなかつたことを示す一証となるかも知れない。同じ修善寺町でも西北方の達摩山地に見られる広野遺跡では、敷石遺構が存在したが、これは加曾利EⅢ式土器の出土地であることを考えると、自ら理解



第21図 東駿及び伊豆縄文時代竪穴住居址主要例

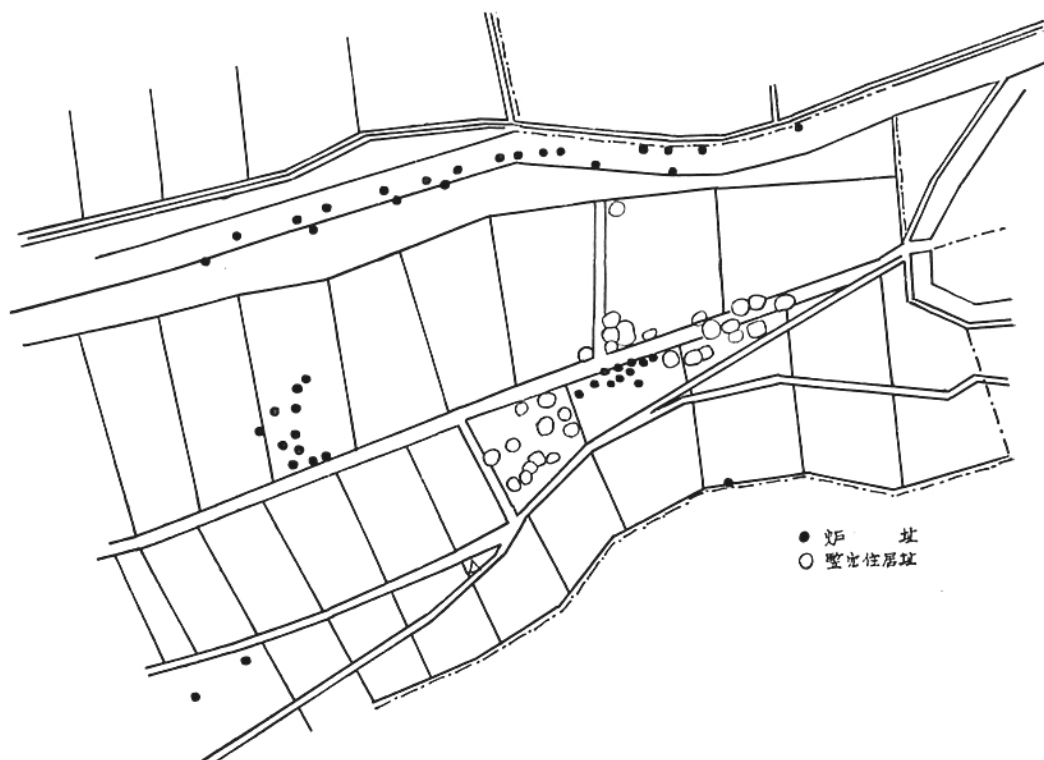
1. 沼津市鳥谷・大芝原遺跡（加曾利EⅡ式）
2. 伊東市玖須美・仏現寺遺跡（加曾利EⅠ式）
3. 伊東市岡・赤坂遺跡（加曾利EⅢ式）
4. 伊豆利島・大石山遺跡（称名寺式）

がいくわけである。

柱穴は出口遺跡の場合、加曾利EⅠ式期の第15号址が6本、第6号址が5本であるが、同時期の伊東市仏現寺でも5本柱が発見されている。加曾利EⅡ式期では4本柱1、5本柱1、6本柱4（推定2を含む）、7本柱1が存在するが、常識的には4本柱または6本柱がよいように考えられる。しかし沼津市大芝原では9本柱が発見され、三島市奥山でも同様のものが見られる点、5本、7本の場合と同様奇異に感ずるわけである。この奇数柱はどう解すべきであろうか。その鍵を握るのは柱穴の形である。それはいずれも真直ぐであり、おそらく真直ぐ円形に並ばせ、その上に相互に杵を渡して輪を作り、これに壁外から垂木を立てかけて円錐形の骨組みを作つたものと思われる。各垂木間は「つる」などで横に幾本も結び、その上に茅を葺き下して円錐形住居を形成したことが容易に推察される。結局円錐形にするには柱の数をできるだけ多くすることが望ましいということになるのである。

住居の入口は風向より考えて北口は考えられず、現在の山ノ畑部落の状況より判断して、おそらく南向きまたは東向きであつたと思われる。第6号住居址の北側に棚状張り出しがあることでも立証できよう。

次に集落に関してであるが、すでに述べたように北に開いた馬蹄形配置をなしていることは最も重要なことであろう。縄文時代早・前期の集落についてはまだ全国的にもその全貌を知る好資料の発表がないが、中期に関しては若干の報告がなされている。まず千葉県小見川町の白井大宮台見塚を始め茨城県霞ヶ浦周辺の諸貝塚では、いずれも一つの台地をめぐつて広範囲に貝殻が堆積し、それらは環状をなしている。^(注10) 岩手県大船渡市蛸之浦貝塚なども同様である。^(注11) 貝殻は舌状台地の周縁に堆積してい



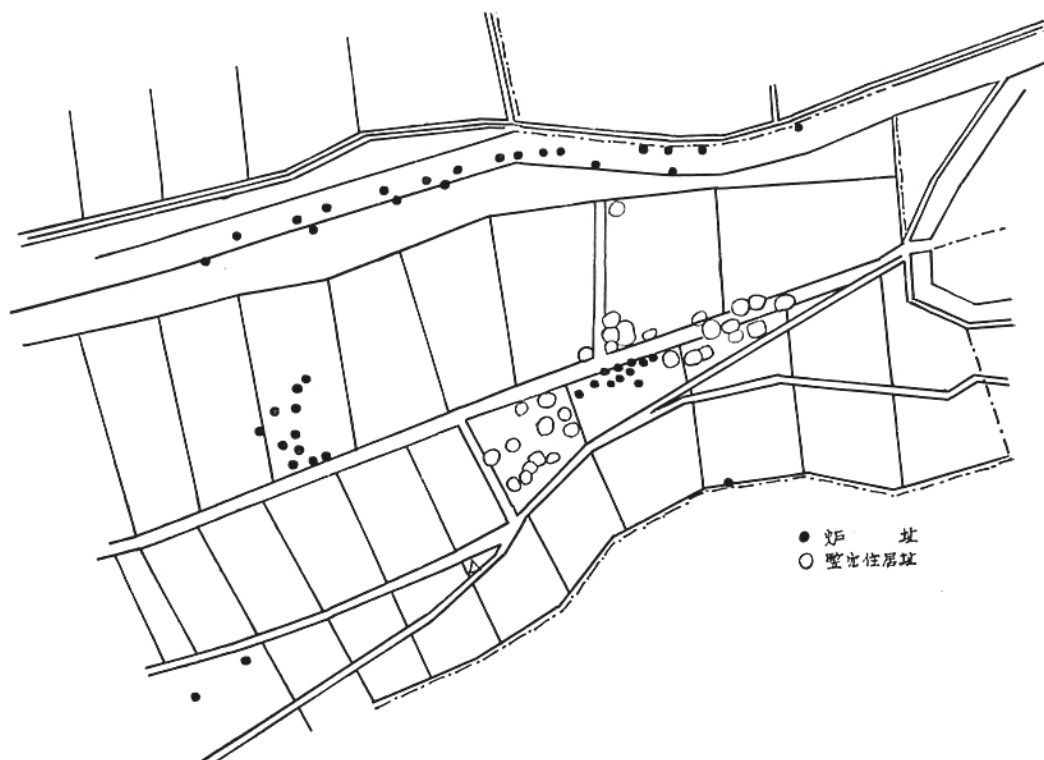
第22図 長野県尖石遺跡竪穴住居址分布図

がいくわけである。

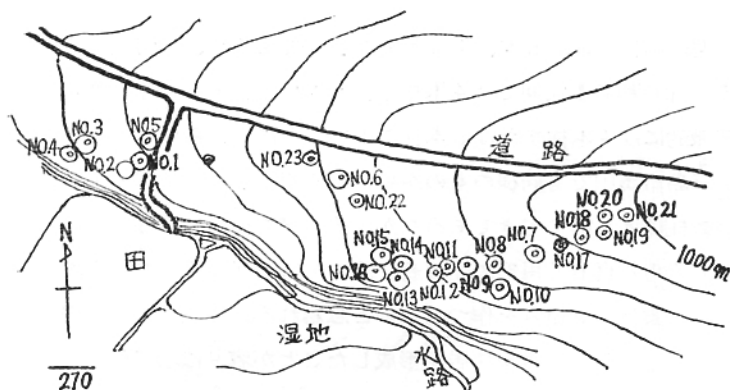
柱穴は出口遺跡の場合、加曾利EⅠ式期の第15号址が6本、第6号址が5本であるが、同時期の伊東市仏現寺でも5本柱が発見されている。加曾利EⅡ式期では4本柱1、5本柱1、6本柱4（推定2を含む）、7本柱1が存在するが、常識的には4本柱または6本柱がよいように考えられる。しかし沼津市大芝原では9本柱が発見され、三島市奥山でも同様のものが見られる点、5本、7本の場合と同様奇異に感ずるわけである。この奇数柱はどう解すべきであろうか。その鍵を握るのは柱穴の形である。それはいずれも真直ぐであり、おそらく真直ぐ円形に並ばせ、その上に相互に杵を渡して輪を作り、これに壁外から垂木を立てかけて円錐形の骨組みを作つたものと思われる。各垂木間は「つる」などで横に幾本も結び、その上に茅を葺き下して円錐形住居を形成したことが容易に推察される。結局円錐形にするには柱の数をできるだけ多くすることが望ましいということになるのである。

住居の入口は風向より考えて北口は考えられず、現在の山ノ畑部落の状況より判断して、おそらく南向きまたは東向きであつたと思われる。第6号住居址の北側に棚状張り出しがあることでも立証できよう。

次に集落に関してであるが、すでに述べたように北に開いた馬蹄形配置をなしていることは最も重要なことであろう。縄文時代早・前期の集落についてはまだ全国的にもその全貌を知る好資料の発表がないが、中期に関しては若干の報告がなされている。まず千葉県小見川町の白井大宮台見塚を始め茨城県霞ヶ浦周辺の諸貝塚では、いずれも一つの台地をめぐつて広範囲に貝殻が堆積し、それらは環状をなしている。^(注10) 岩手県大船渡市蛸之浦貝塚なども同様である。^(注11) 貝殻は舌状台地の周縁に堆積してい



第22図 長野県尖石遺跡竪穴住居址分布図



第23図 長野県与助尾根遺跡竪穴住居址分布図

長野県茅野市の尖石遺跡、および与助尾根遺跡がある。尖石では昭和5年より8年までに、炉址45ヶ所が発見され、さらにこの炉址を中心とする住居址の存在を知つて、昭和15年から17年までの間に住居址32ヶ所と、15の炉址を追加した。こうして100個に近い多数の住居址が存在したことを確認したのである。その配置を見ると東側に口を開いた、大きな馬蹄形をなしていることがわかる。これも出土遺物から見ると勝坂式から加曽利E式に至る複合遺跡で、200～300年間続いた集落と推定されている。^(注13)したがって正確には各時期別の細かい分析が必要であろう。それにしても馬蹄形配置が崩れるものではないようである。

もう一つこの尖石の北隣にある与助尾根は北半が調査されていないが、南半の発掘状態を見ると、28の住居址がやはり東に開いた馬蹄形集落の存在したことが容易に推測できるのである。^(注14)東側が開いているのは、その方向が高所に当るためで、出口遺跡では北側がやや下るとはいえ、また高くなり、全体的には南に向つて下向する丘陵であることを考えれば、低い方向に向つて張り出す点、尖石や与助尾根などと相互に共通するわけである。出口遺跡の場合には、斜面における住居址の高低比は250cm以内である。その傾斜の中に16戸の住居址が包括される。

こうして縄文中期の集落形態として、典型的な馬蹄形配置をとる具体例がまた一つ追加され、また、加曽利EⅡ式期の集落にはほぼ10軒を単位として構成されるものの存在することを明らかにした。残された問題は、住居が馬蹄形に配置された中央空地の意味であるが、恐らく部落共同の広場として各種の用途があつたであろうが、この出口遺跡の場合には、極く少量の土器片が出土したのみで、他に何等の施設、遺物等を見ることができなかつた。

最後にこの集落に居住した人々の生業であるが、海浜や大きな川から遠ざかると共に石錘が皆無であるのに対し、石鏃のきわめて多い点等を考え合わせると、山間における狩猟中心の集落であつたことが推知されるのである。

結局出口遺跡は中伊豆地方における縄文中期後葉の山村集落であつた。

るので、その内側に集落があつたものと考えられる。したがって貝層の線に平行して住居址が存在するとすれば、その集落の形態はほぼ馬蹄形をなすであろうことが推測されるのである。このことは本県浜松市観塚遺跡等の後期の集落についても指摘されているところである。^(注17)

実際に縄文中期集落の形態がある程度明確に現出した例としては長

8. あ と が き

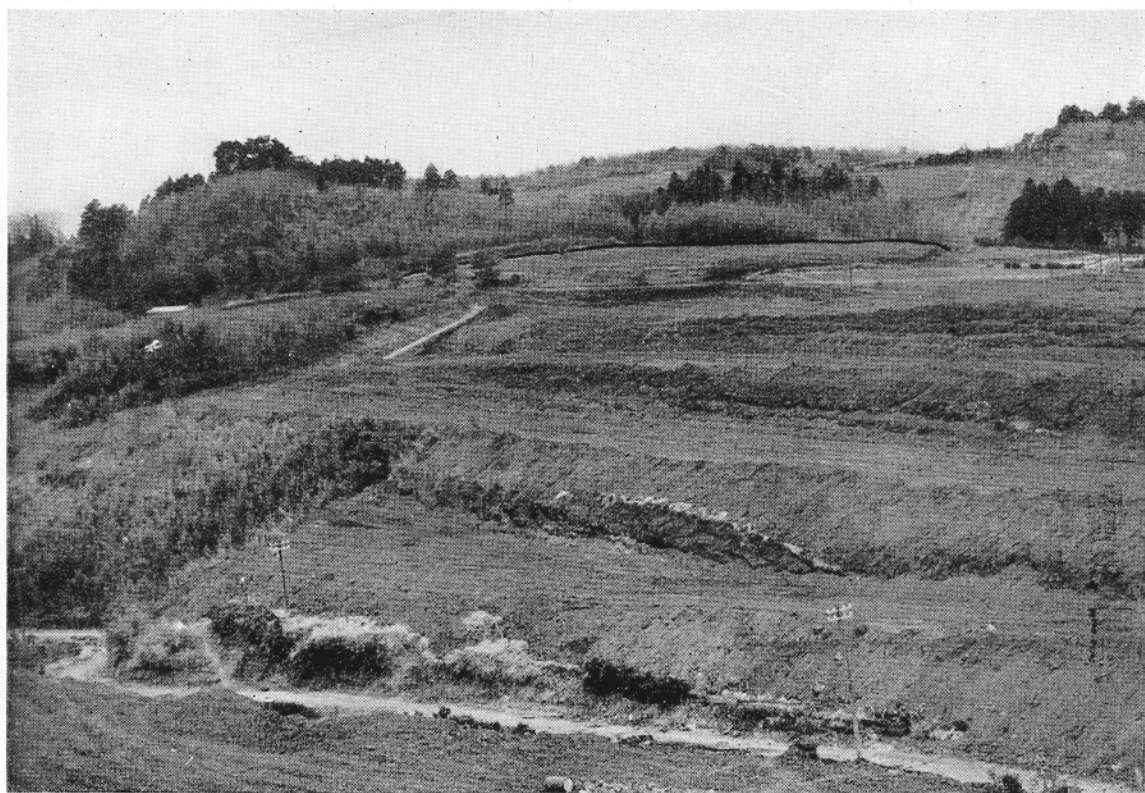
以上不意の工事に伴う緊急調査の結果をまとめて見たが、波状的飛石調査が終了した1月下旬から僅か1ヶ月足らずにしてまとめた原稿であるため、十分な検討のできなかつた面もあるであろうし、参照すべき文献のもれもあり、また大方諸賢の御教示を仰ぐ暇もなく、決して満足なものとはなつていない。しかし記憶の新たな中にまとめた利点もあつたことを考えると、決して無駄ではなかつたと思うのである。今後の研究や各方面からの御指導によつてなお修正されることもあろうが、縄文中期集落のほぼ完全に近い形態を知り得るという、まことに幸運にも珍しい機会に恵まれたので、縄文集落研究の一助にとり考え、とりあえず概要を報告して、叱正を期待する次第である。(1964年2月末日)

(注)

1. 「沼津市誌」上巻中小野真一「先史文化の発展」。1961年。
2. 小野真一「吉原市上ノ段遺跡調査略報」沼津女子商業高校考古館報第4号。1964年。
3. 「沼津市誌」上巻。1961年。
4. 岡本勇「横須賀市吉井城山第一貝塚出土の土器」横須賀市博物館研究報告(人文科学)第7号。1964年。
5. 「伊東市誌」資料篇中長田実・小出義治「考古学的調査報告」1958年。
6. 「伊東市誌」本編の中長田実「原始時代」に紹介。1962年。
7. 8. 「三島市誌」上巻中長田実「原始社会」に紹介。1953年。
9. 東京都文化財報告書6「伊豆諸島文化財総会調査報告」第二分冊 戸沢充則「利島大石山遺跡の第二次調査」1960年。
10. 「世界考古学大系」1。内陸文化の繁栄の項。
11. 同上。
12. 麻生優「縄文時代後期の集落」考古学研究26号。1950年。
浜松市教育委員会「蜷塚遺跡総括篇」内藤晃「住居」1952年。
13. 宮坂英式「尖石石器時代遺跡」史跡名称天然記念物調査報告(文化財保護委員会編)第1集。1957年。および注10と同じ文献。
41. 宮坂英式「長野県諏訪郡与助尾根遺跡」日本考古学年報3 1955年。



遺跡の遠景（南方、立間遺跡より）



遺跡の全景（黒線の部分、東側より）



遺跡の調査風景



ブルドーザーによつて表土は破壊された